

Geo-Communication

ジオ・コミュニケーション NL No.2

ジオ・コミュニケーション

ニュースレター (=NL) No.2

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか (1)
—マルクスとの違い?—

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します。

ジオの語源は、英語のgeography のギリシャ語 γεωγραφία (=geographia) の接頭語である γεω (=geo) にあり、地球、土地、土壌などを意味します。コミュニケーションは、ラテン語の communicare を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれ、communis (一緒に)、あるいはフランス語の commune (共同体)、英語の community の語源となっています。

「ジオ・コミュニケーション」では、主に話題提供を行う「ニュースレター」 (=NL) と個別の論文である「ワーキング・ペーパー」 (=WP) の二種類を公刊していく予定です。

なお、発行元は、香川大学を本拠としている「地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム」 (=ICEDS) が運営している環境史研究プロジェクトです。

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授

村山 聡



Rocky Mountains, Colorado, USA,
October 4, 2007

連絡先：香川大学 ICEDS代表 村山 聡
住所：香川県高松市幸町1-1 香川大学
電話/Fax: 087-832-1571
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp
URL: <http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi>

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか（1）—マルクスとの違い？—

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授 村山 聡

マックス・ヴェーバーに関して日本語で読める「伝記の決定版」が出版された。今野元による『マックス・ヴェーバー—ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』（東京大学出版会、2007年）（=2007年度日本ドイツ学会奨励賞受賞）である。

しかしその秀逸な伝記においても、なぜヴェーバーが自然を扱わなかったのかという理由を見出すことは難しい。

「資本主義の精神」をめぐる議論において日本では特に著名な社会学者であるマックス・ヴェーバー（1864-1920年）は、その数ある著作において「自然」を語る事がほとんどなかった。それはなぜか？

前稿で、マルク・ブロックの遺書『歴史のための弁明—歴史家の仕事—』（岩波書店、1956年）から、以下のような引用を行った。再掲したい。

科学は、光線がたがいに結びつきたがいにしみ通るあの交叉するサーチライトの自由な動きのおかげで、現実をいっそうよく観察する目的でのみ、現実を分解する。それぞれのサーチライトが自分だけがすべてを見るのだと主張する時に、また知識の各分野が我こそ本場であると自任する時に、はじめて危険は始まる。

しかしながら、もう一度我々は自然科学と人文科学との間に、何かしら間違っただけの幾何学的な平行関係を自明のこととして仮定する

ことを、警戒しようではないか。（ブロック、同書、124頁）

ブロックは、自然科学と人文科学との間の問題として、同時代状況を語っているのであるが、ここに社会科学も加えるとすれば、知の世界の歴史として、さらに埋めるべき陥穽が見いだされるように思う。ヴェーバーが生きた時代、アイゼナハでドイツ社会政策学会第1回大会が開催されたのは1872年10月であり、ヴェーバー自身が深く設立に関わったドイツ社会学会の第1回大会は、フランクフルト・アム・マインで1910年11月に開催された。

ヴェーバーは、自分たちの社会学者のサークルに人種衛生学者であるアルフレート・ブレーツを迎え入れることに尽力すると同時に、このドイツ社会学会の第1回大会において、弱者の自然淘汰と隣人愛との関係をめぐって、ブレーツとヴェーバーでの論争が展開された（今野、同書、182-191頁）。

今野によると、ブレーツの講演に対するヴェーバーとの応答が詳細に記録されていたようであるが、元々、ヴェーバーは、「自然科学的な」社会学の代表者（今野、同書、184頁）と見て、学会への加入と理事就任を要請したようである。この論争にはいくつかの争点があったようである。ブレーツの独自の人種論、「生命的人種」と「分類的人種」との区別に基づく講演を受けて、第1に、

隣人愛の原則が倫理観を支配してきたという理解、第2に、社会の興隆と人種の興隆との関係、そして、第3に、アメリカ合衆国における白人と黒人、第4に、社会は生き物だというプレーツの命題、そして第5に、「社会生物学」と「人種生物学」との違い、そして「社会学」との関係に関する議論などである。

ここで一点だけ明らかにしておきたいのは、ドイツ語圏の知の世界において、「社会学」という学問分野が誕生するその時代にヴェーバーの種々の著作を見出すことができるという点である。

ヴェーバーが「自然」を直接取り扱わないのは、すでに「自然科学」が学問分野として確立しているにも関わらず、「社会学」という分野などは未成熟であったためなのか、それとも、問題は学問世界という知の世界だけではなく、さらに深い意味連関を考えるべきなのか。マルク・ブロックの指摘を考える上でも、また、日本の社会科学においては、しばしば、ヴェーバーと対比的に取り上げられて来たカール・マルクス（1818-1883年）との違いに着目する必要がある。

玉野井芳郎は、「スミス以降の全経済学の歴史のうえで、ひとりマルクスだけは Stoffwechselということばを用いて、生産と消費の関連を人間と自然とのあいだの物質代謝の基礎にとらえようとした」と指摘している（玉野井芳

郎、「エコロジーを求めて」、初出『経済セミナー』、日本評論社) 1974年11月号、『エコノミーとエコロジー—広義の経済学への道』、みずす書房、1978年所収、42頁)。

ヴェーバーは、著名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の末尾で、1905年の時点で、世界の将来に関して諦観的な叙述をしている。

営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない。将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか、そして、この巨大な発展が終わるとき、まったく新しい預言者たちが現れるのか、あるいはかつての思想や理想の力強い復活が起こるのか、それとも—そのどちらでもなくて—一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか、まだ誰にも分からない。それはそれとして、こうした文化発展の最後に現れる「末人たち」> letzte Menschen < にとっては、次の言葉が真理となるのではなからうか。「精神のない専門人、信条のない享楽人。この無のものは、人間性のかつて到達したことの無い段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう」と。

(マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳、岩波文

庫、1989年、366頁。原書初出、1905年)

このヴェーバーの論文は、筆者の学問生活の出発点にあったものであるが、この20年間、直接触れることのなかったものである。カルヴァン派とルター派の違いなど、地域史研究において、ヴェーバーとの対話に基づきドイツ語で博士論文を作成したこともあったものの、歴史人口学ならびに家族史研究を主軸に研究を進めていた時にはほとんど顧みることがなかった。

ところが、「比較史料学」という新たな歴史学的方法論の提示と共に、ミクロナ地方史研究から自然も含めた「環境史」研究という分野に一步踏み込んだ時点で、ヴェーバーについて議論していた内容についても、別世界から新たな光を投げかける必要性を感じるようになって来た。ただし、まだ見えない文脈も多く、また、ヴェーバーのような諦観のみが先行する状況ではある。

ヴェーバーによって議論された宗教的信条と社会や経済の発展あるいは家族史的な文脈との関連については、いくつかの論文を公表してきた。また、ヴッパータールというライン下流地方の一地域の近世社会の史料状況は、後の比較史研究の土台となっているものであり、ドイツ語圏の近世史料の体系的な理解は、時代を越えた地域比較の根幹である。いずれこのシリーズでも触れる機会があると思われる比較史料学の方法も、その議論の延長線上にある。

ところが、これまで、論文としては、全く結実を見せていないものの、「自然」との関係では、言及しないわけにはいかないものが、マルクスの『経済学・哲学草稿』(城塚/田中訳、岩波文庫、1964年、原書1844年)あるいは『新版 ドイツ・イデオロギー』(花崎訳、合同出版、1966年、原書1845-1864年)などである。

特に、「疎外された労働」に関する議論では、玉野井の指摘にもあるように、「自然」と人間・社会との関係について、理論的・哲学的な洞察がなされている。ヴェーバーの議論と今後対比的に検討していく上でも、マルクスの疎外論の概略を理解しておく必要があると思われる。というのも、ヴェーバーによって境界づけられた自然科学と人文・社会科学の垣根がどのような文脈を消し去っているのかを明らかにすることにより、ヴェーバーの諦観から一步抜け出すことができるのではないかと考えたからである。

マルクスの自然観については、すでに参考にすべきいくつかの叙述があるが、ここではまず、議論の本筋を押さえておきたい。その際、参考にしたのは、エーリッヒ・フロムの『マルクスの間観』(樺訳、第三文明社、レグルス文庫86、1977年、原書1961年)である。

このフロムの著作はもともと『経済学・哲学草稿』の初めての英訳と一緒に収録されていたものであり、当初、フロム自身、この初出の英訳と切り離して、フロム

の文章だけを翻訳することには反対であったため、合同出版社版では、両者が組み込まれていた。その後第三文明社から改版を出すことになり、フロムからも承諾を得たようである。あくまでもフロムはマルクスを読む姿勢を貫いていたのであろう。

疎外（または「疎遠」）ということは、マルクスにとっては、人間が世界を把握するにさいして自己自身を行動的主体としては経験しないで、世界（自然や他人や彼自身）が人間にとって疎遠なものとしてあることを、意味している。（フロム、同書、85頁）

自然の主人になったと信じている疎外された人間は、事物や環境の奴隷となってしまっているのであり、世界の無力な付属物となってしまうのであって、このことが、同時にわれわれ自身の力の凍結された表現なのである。（フロム、同書、101頁）

マルクスの疎外観については、歴史が行なった訂正がただ一つある。マルクスは労働者階級がもっとも疎外された階級であったし、したがって、疎外からの開放は必然的に労働者階級の開放から出発するだろうと、信じていた。マルクスは疎外が大多数の人びとの、ことに機械よりはむしろシンボルや人間を操作する人たちのつねに増大する部分の運命とならざるをえない限度を予見していなかった。どちらかといえば事務員や販売人や幹部役員は今日では熟練した職人よりもずっと疎外されている。・・・どの程度までわれ

われ自身の作った事物や環境がわれわれを支配するようになるかを、マルクスはほとんど予見することはできなかった。（フロム、同書、108-110頁）

フロムはマルクスの疎外論を正確に紹介していると思う。しかし、それでもマルクス自身の言説には特定の異同を見いだすこともできるかもしれない。次号では、さらに詳しく、マルクスの疎外論と自然観との関係を検討してみたいが、その前に、ヴェーバーが「自然」を語らないその理由の一端を知ることのできる文章を紹介しておきたい。ヴェーバーの晩年の講義の記録とされている『一般社会経済史要論』（以下『経済史』）（黒正／青山訳、岩波書店、上下、1954/55年、1919年から1920年にかけての講義より）の以下の記述であるが、ここでは訳本のまま引用をすることはせず、現代表記に変えており、また、訳本では引用されているドイツ語の原語は省略している。

まず経済行為とは何か。いうまでもなく経済行為は人間の行為、特に理解しうる行為である。そうであるならば、われわれは経済的なる行為を、他の経済的ならざる行為からいかに区別するか。区別の基準は行為者自身がいかなる動機に基づいて行動するか、・・・行為をなすにあたって行為者自身いかなる目標に向かつて行為を方向づけるか、に存する。・・・ある行為を経済的ならしめるような行為の動機はいかなるものであるか。人間が効用給付

を欲求すること、つまり、経済行為がこの効用給付と不可分の関係を有することは言うまでもない。さて人間がその要求する効用給付そのもの、あるいはそれを処分するチャンスを獲得しようとし、この目的からこの獲得のための準備と努力とに向かってその行為を方向づける場合、・・・その行為がこの獲得への配慮たる意味を有する場合、その限りにおいてこの行為は広義において経済的であるという。この点についてなお若干の説明を付け加えよう。

ここでわれわれが問題にしているのは効用給付である。これに反して、この効用給付の担い手であり、その給源である「物財」自体はここでは問題の埒外にある。・・・ここでわれわれが考えているのは、その使用可能性だけである。・・・（たとえば）特定の馬そのものではなく、馬を使用することによってその時々を生ずる個別的な給付（働き）である。効用給付はその源泉によって物的なるものと人的なるものに分かれるが、簡単のため物的効用給付を「財」と呼び、人的給付を単に「給付」と呼ぶことにする。（ヴェーバー、『経済史』、上巻、3-4頁）

ヴェーバーが効用給付の担い手であり、その給源である「物財自体」（＝自然）は取扱わないと宣言しているところが問題になる。ここからは、長く厚い叙述が必要になると考える。